

## 「防災寺子屋 sole! (そ～れ)」 の取組

千葉県 NPO 法人パートナーシップながれやま 流山子育てプロジェクト  
代表 青木八重子



私たちは千葉県流山市で防災・減災の啓発活動に取り組んでいる、子育て当事者の母親グループです。流山市は、つくばエクスプレスの開通により、子育て世代が流入し、県内でも人口が急増している地域です。私たちのグループは、流山市主催、NPO法人パートナーシップながれやまが企画運営を手掛ける保育付きの男女共同参画講座の修了生有志が、「講座終了後も学習を続けたいね」と集まったグループです。

活動当初は、ベビーカーでお散歩できる街歩きMAPや、父親の育児参加を応援する冊子を制作するなどの活動をしていました。私たちが、防災・減災の活動を始めたのは2011年（平成23年）の大震災がきっかけでした。

震災の不安な経験が、「いざという時の備え」について考えるきっかけとなり、子育てしている人にとって本当に役に立つ防災・減災対策をまとめよう、と活動がスタート。消防署や市の防災危機管理課、民間の専門家などを招いて勉強会を行い、数々の防災フォーラムや施設にも足を運んで防災・減災の研究を行うとともに、乳幼児を抱える世帯にアンケートを行い、どんな不安を抱えているのかを調査しました。

そうして2014年に完成したのが「わたしにもできる防災・減災ノート in 流山」です。災害時の行動のフローチャートや、家の中の防災対策、備蓄や持ち出し品のリスト、防災ピクニックのすすめや、性犯罪への啓発、ご近所付き合いや自治会

に参画することまで、乳幼児世帯の防災・減災の不安に応える内容となっています。捨てられてしまうことの無いよう、写真を



貼ったり、個別の情報を書き込んだり、それぞれの家庭でオリジナルの冊子ができるような工夫をしました。

アンケート調査や勉強会から見えてきた課題は「何が不安なのか漠としてわからないけど、とにかく不安」な子育て家庭の実像。冊子では、災害の様々なシーンを細分化して考えることで、不安を「見える化」し、細分化された不安を、暮らしの中でひとつずつ解決していくことを目指しました。「わたしにもできること」、を積み上げていくことで、災害時にも毎日の「暮らし」をなるべく継続するのが目標です。

そして、啓発冊子を作るだけでなく、ワークショップを行って、より内容への理解を深めてもらおう!と結成したのが防災キャラバン隊「防災寺子屋 sole! (そ～れ)」です。市のコミュニティ課に相談して、防災活動に関心の高い自治会を紹介してもらい、地域に出向いてワークショップを行いました。キャラバン隊の評判は口コミで広がり、自治会や親



市民まつりでクイズ大会 多くの親子が参加

子の集まりなど、市内各所で防災ワークショップを展開しました。

自治会の役員さんは、皆さんとても好意的で「子育て中の人に声をかけるから」と熱心に集客してくださるのですが、蓋を開けると、自治会館に集まっているのはご高齢者の方々。「子育て中の人に向けた講座なのに……どうしよう」と戸惑いを隠せない私たちに、「赤ちゃんとお高齢者は共通点が多いのよ。固いものは食べられない、おむつも必要、何よりひとりでは逃げられないでしょ」と笑って教えてくださいました。結果、乳幼児世帯に向けた講座は、高齢者世帯にも大好評。防災寺子屋は、子育て中の人も、ご高齢者も、そして子どもたちも一緒になって、我が家の防災・減災、そして地域の共助について考える場となりました。

自治会を回り、キャラバン隊活動を続けていく中で気が付いたのは、さまざまな困難を抱える災害弱者の問題です。地域にいるのは、自治会館でのワークショップに参加できる人だけではないという問題意識から、昨年は外国人向けの防災ハンドブックの制作に取り組みました。当初「わたしにもできる防災・減災ノート in 流山」を英訳しようと考えていたのですが、英語版のサンプルを作り、国際交



自治会にて ご高齢の参加者が中心

流協会の日本語教室に持参して感想を聞いたところ、英語が読める外国人の方は皆無で、逆に「日本語版はないのか？」と聞かれてしまいました。日本で暮らす外国人の共通語は日本語、という当たり前前の事実気づき、小学生でも読める日本語と、英語、中国語の対訳を付けた「多言語の防災ガイドブック～私にもできる防災・減災ノートⅡ～」を1月に完成。現在は、文字情報を読めない人や動画世代の若者に向けてYouTubeを活用した防災情報の動画配信に取り組んでいます。

私たち、乳幼児を抱えた子育て世帯も、高齢者世帯も、外国人や障がいのある人も、いわゆる「災害弱者」なのですが、災害弱者は災害弱者だから見える視点がある。そして、災害弱者にも自助共助のためにできることがあるのです。災害弱者をエンパワーメントすることで、「地域の力」にしていく。「地域の絆」を深めていく。乳幼児を抱える私たちの作った防災・減災ノートやキャラバン隊の事例が、そのためのきっかけになったら、とても嬉しいことだと思います。



多言語版を制作